

姫路市所在

# 塩淵3号墳

——神谷ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書——

1999年3月

兵庫県教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、兵庫県姫路市豊富町神谷字塙瀬に所在する塙瀬3号墳の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は神谷ダム建設工事に伴い、兵庫県企業庁姫路利水事務所の依頼を受けて兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。
3. 発掘調査は全面調査を平成8年11月21日～平成9年1月30日の期間に実施した。調査面積は290m<sup>2</sup>、遺跡調査番号は960343である。
4. 全面調査の担当者は深江英憲・服部 寛である。
5. 本書に掲載した遺跡分布図と位置図は建設省国土地理院発行の5万分の1地形図「竜野」「北条」を使用している。
6. 本書に示した方位は国土座標V系を基準にし、水準は東京湾海水準（T.P.）を使用した。方位は座標北を示す。
7. 本書の執筆分担は目次に記したとおりである。
8. 本報告にかかる遺物・写真などの資料は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町2-1-5）及び、魚住分館（明石市魚住町清水字立合池ノ下630-1）に保管している。
9. 本書の編集は中筋貴美子、尾鷲都美子の補助を得て深江・服部が担当した。

# 目 次

## 目 次

第1章 発掘調査の経過 .....	深江 英恵 .....	1
第1節 発掘調査にいたる経緯 .....		1
第2節 発掘調査の経過 .....		1
第3節 整理作業の経過 .....		2
第2章 遺跡をとりまく環境 .....	服部 寛 .....	3
第1節 遺跡の地理的環境 .....		3
第2節 遺跡の歴史的環境 .....		3
第3節 咸淵古墳群 .....		5
第3章 調査の成果 .....	服部 .....	9
第1節 遺跡の立地 .....		9
第2節 遺跡の調査 .....		9
第4章 出土遺物 .....	深江 .....	23
第1節 土器 .....		23
第2節 金属器 .....		24
第5章 結語 .....	服部 .....	25

## 挿 図 目 次

第1図 明治29年神谷池改修工事の碑	1
第2図 発掘調査開始状況	1
第3図 甲山遠景	3
第4図 周辺の主要古墳位置図 (S=1/50000)	4
第5図 塩瀬1号墳現況	5
第6図 塩瀬古墳群全体図 (S=1/10000)	6
第7図 岩屋公民館の石棺	7
第8図 岩屋寺の石棺	7
第9図 調査前地形測量図 (S=1/150)	9
第10図 塩瀬3号墳調査前現況	10
第11図 調査後地形測量図 (S=1/150)	10
第12図 内護列石検出状況	11
第13図 墳丘除去後地形測量図 (S=1/150)	11
第14図 土層断面図 (S=1/80)	12
第15図 墳丘断面図 (S=1/50)	13
第16図 内護列石平面図 (S=1/50)	14
第17図 奥壁	15
第18図 右側壁	15
第19図 左側壁	15
第20図 天井石間のぐり石	15
第21図 天井石上面からの俯瞰図 (S=1/40)	16
第22図 石室実測図 (S=1/50)	17
第23図 石室内埋土断面図 (S=1/50)	18
第24図 天井石除去作業	19
第25図 石室内埋土断面	19
第26図 上層床面遺物出土状況 (S=1/30)	20
第27図 下層床面遺物出土状況 (S=1/30)	21
第28図 出土土器	23
第29図 出土金属器	24
第30図 調査時の一風景	25

## 表 目 次

表1 塩瀬古墳群一覧表	8
-------------	---

## 図 版 目 次

- 図版1 塩瀬古墳群遠景
- 図版2 塩瀬3号墳墳丘
- 図版3 塩瀬3号墳墳丘断面
- 図版4 塩瀬3号墳墳丘断面
- 図版5 塩瀬3号墳石室
- 図版6 塩瀬3号墳石室内部
- 図版7 塩瀬3号墳石室床面（上層）
- 図版8 塩瀬3号墳石室床面（下層）
- 図版9 塩瀬3号墳掘り方および石材
- 図版10 塩瀬3号墳出土遺物



塩淵3号墳の位置

# 第1章 調査の経過

## 第1節 発掘調査にいたる経緯

神谷ダムは、姫路市東北部藤の木山自然公園の西の、土捨場の北山田と原石山の南山田に挟まれた急峻な谷地形に当たり、ダム本体は谷底を流れる神谷川と谷奥でその流れを集め神谷池の合流部に位置している。旧来のダムは、明治29年に農業用水を主目的として建設されたが、この度、兵庫県企画庁姫路利水事務所の施工による兵庫県水道用水供給事業に伴い、神谷ダム建設工事が計画された為、それに先立ち、当該用地の遺跡の有無について、先ず分布調査を実施した。

分布調査の実施については、以前当地で古墳が確認されていたものの、近年不明となっていたものが、ダム建設事業に伴う地元説明会において、建設用地に古墳が存在するとの、地元住民からの指摘を受けた為、古墳の有無の確認という目的が含まれていた。現地踏査では、果して古墳の存在を確認できた。不明となった要因としては、明治期に神谷池から神谷川右岸の斜面上に付設した用水路工事、及び昭和10年の用水路改修工事の際に排出された土砂が用水路下にあった古墳の上に被覆したもので、発見当初は石室の羨道部が僅かに開口するのみであった。

分布調査の結果、古墳が建設予定のダム本体部分にあたる事から、発掘調査の必要性が高まった為、全面調査を行なう運びとなった。

ところで、全面調査にあたっては、古墳の名称を「塩淵3号墳」と称し、報告書でも同様としているが、名称の確定には若干の問題を秘めている。詳細については次章に記述する。

## 第2節 発掘調査の経過

調査範囲の設定は、辛うじて露頭している羨道部と玄室に続く石室内壁の角度から大体の軸を推定し、そこから周溝の存在も考慮しながら両翼20mの幅を設定した。また、その軸に直交して、山側では用水路造成時の法肩から、神谷川側では前庭部での墓前祭祀の存在も考慮にいれて羨道部から20mまでを範囲とした。

発掘調査は、仮に設定した主軸に従って畦を残し、被覆層及び表土層を除去したが、盛土及び周溝等は、平面での確認が困難であった為、



第1図 明治29年神谷池改修工事の碑



第2図 発掘調査開始状況

珪沿いを盛土ごと断ち割り、盛土確認後地形測量を行なった。また、盛土内には人頭台の縁による所謂内護列石（詳細は別章にて後述）が確認できたので、盛土を除去した後、その範囲及び状況を裏込めの状況と共に記録した。その後、石室全体を検出し、ヘリコプターによる空中撮影を行い、状況写真及び平面図を記録してから天井石を除去した。天井石の除去後は、石室内を掘削し、床面の検出を試みた。

石室内は、奥壁と羨門とを結ぶ長軸線を中心とする奥壁断面及び両側壁の立面図と、長軸に対する垂線で切った両側壁内輪郭及び奥壁立面図の記録を撮った。また、基底石の内輪郭を記録した後奥壁及び側壁を除去し、石室掘形の平面図及び（石室構築前の）地形測量を行なった。さらに、古墳本体の調査終了後、下層遺構確認の為、前庭部付近を断ち割ったが、遺構及び遺物は認められず、これを以て調査終了とした。なお、石室として使用された石材については、調査区の傍らに集積した。

・発掘調査の体制

調査主体 兵庫県教育委員会社会教育・文化財課

調査担当 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

現場担当者 技術職員 深江 英恵

事務職員 服部 寛

現場事務員等 森崎 由紀子・曾我 瑞恵

### 第3節 整理作業の経過

調査の結果、出土遺物は28㍑コンテナに1箱分の土器と鉄器1点であった。鉄器は、平成9年度から保存処理を実施した。出土土器は、現場事務所において洗浄作業のみ行ない、ネーミング・接合・補強及び復元は兵庫県埋蔵文化財調査事務所において平成10年度から開始し、また実測・写真撮影・トレース及び印刷等報告書刊行における一連の作業についても同年に実施した。

・整理の体制

職員 技術職員 深江 英恵

事務職員 服部 寛

整理担当職員 主査 加古千恵子（金属器保存処理担当）

主査 森内 秀造

主査 菅田 淳子

非常勤嘱託員 実測・レイアウト・トレース 中筋貴美子（主任技術員）、尾鷲都美子（図化技術員）

接合・復元 香川フジ子（企画技術員）、早川亜紀子・中田 明美・

前田千栄子・吉田 優子・中西 瞳子・八木富美子・

松末 妙子（図化技術員）

金属器保存処理 栗山 美奈（主任技術員）、和田寿佐子（企画技術員）

前川 悅子（図化技術員）、藤川 紀子（図化補助技術員）

## 第2章 遺跡をとりまく環境

### 第1節 地理的環境

塩淵古墳群は姫路市北東部の豊富町神谷に所在する。豊富町は旧国名の播磨國にあたり、明治22年に神東郡豊富村、昭和31年神崎郡神南町の大字、同33年から姫路市の大字となる。豊富町の範囲として、東は岬を越えて加西市、北は山田町牧野接し、西は市川、南は標高200mの篠東山系を境とする。地形的には、市川左岸の沖積地および市川支流の神谷川の扇状地からなっている。塩淵古墳群は神谷川によつて東から西方向に開析された谷地形に位置する。

豊富という地名は、『播磨の国風土記』の神崎郡藤山里の項に「云宵岡者、伊与都比古神、与宇知加久牟豊富命相繼之時、宵陞此岡、故曰宵岡」と見え、この豊富命に由来している。

地質的には、山塊は中生代に起源をもつ広峰層群書写累層の多結晶凝灰岩と相生層群伊勢累層のガラス質～流紋岩質多結晶凝灰岩、およびそれらを包含する崖錐性体積物からなり、平野部は市川およびその支流の神谷川の沖積層からなる。石室の石材には背後の山に露頭する凝灰岩および、崖錐性体積物に包含される凝灰岩を用いている。



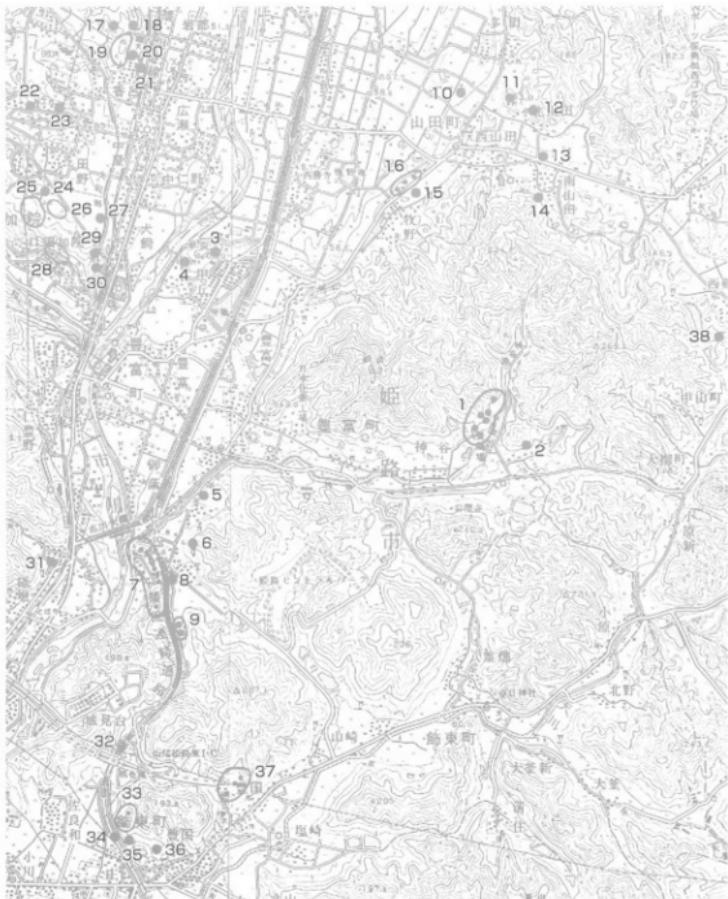
第3図 霧岡比定地の甲山遠景

### 第2節 歴史的環境

塩淵古墳群の位置する豊富町周辺あまり遺跡は知られていない。ここでは、広く市川中流域の古墳を概観してみる。

市川中流域で古墳時代前期に遡る古墳として、鷺音寺山古墳（市川町）、横山7号墳（7）、黒岩山古墳（32）などがある。観音寺山古墳は比高差約100mの山頂に立地する直径10m前後の円墳もしくは方墳で、長さ3m余りの竪穴式石室を内部主体に持つ。横山古墳群は8基からなる前期から後期にかけての古墳群で、中でも7号墳は全長約32mを測る前方後円墳である。竪穴式石室を内部主体に持ち、さらに後円部に竈棺、箱式石棺、土壙墓など多数の埋葬施設を持つ。詳細は不明な点が多い。黒岩山古墳は箱式石棺を内部主体に持つ。

古墳時代中期の古墳として、相山古墳（福崎町）、北川古墳（20）、柏尾狐塚古墳（23）、法花堂2号墳（26）、清盛塚古墳（11）などがある。相山古墳は全長約40mの前方後円墳で、円筒埴輪が出土しているが詳細は不明である。柏尾狐塚古墳は粘土被もしくは木棺直葬の小円墳で内行花文鏡や素文鏡が出土している。北川古墳の箱式石棺からも内行花文鏡が出土している。法花堂2号墳からは甲冑と鉄劍が出土している。いずれも市川中流域およびその支流の小平野や交通の要所に立地し、小地域の首長墓であると考えられる。



- |           |           |             |           |            |
|-----------|-----------|-------------|-----------|------------|
| 1 塩淵古墳群   | 2 奥ノ垣内古墳  | 3 玉塚古墳      | 4 江鶴古墳    | 5 砂川古墳     |
| 6 曽坂古墳    | 7 横山古墳群   | 8 三方古墳      | 9 池ノ下古墳群  | 10 諏訪神社古墳群 |
| 11 清盛塚古墳  | 12 御大師山古墳 | 13 塚ノ本古墳    | 14 奥ノ谷古墳  | 15 原田ノ森古墳  |
| 16 三ツ塚古墳  | 17 狐塚古墳   | 18 東羽部古墳    | 19 地蔵山古墳群 | 20 北川古墳    |
| 21 勅刺塚古墳  | 22 柏尾古墳   | 23 柏尾狐塚古墳   | 24 ウツキ谷古墳 | 25 隠谷古墳群   |
| 26 法花堂古墳群 | 27 大塚古墳   | 28 宮ノ前古墳群   | 29 大塚古墳   | 30 伊勢山古墳   |
| 31 権現山古墳  | 32 黒岩山古墳  | 33 トンノク谷古墳群 | 34 庄北古墳   | 35 宝塚古墳    |
| 36 トウヅカ古墳 | 37 鈴東古墳群  | 38 刀坂熊野神社古墳 |           |            |

第4図 周辺の主要古墳位置図 ( $S = 1/50000$ )

古墳時代後期になると市川支流域の小平野ごとに爆発的に群集墳が拡がる。各小平野ごとに概観すると、市川支流の神谷川流域の上流域には塩淵古墳群（1）、奥ノ垣内古墳（2）がある。神谷川と市川の合流地点付近には砂川古墳（5）、曾坂古墳（6）、横山古墳群（7）、三方古墳（8）、池ノ下古墳群（9）がある。市川の形成する沖積平野にある独立丘陵の甲山に玉堀古墳（3）、江鰐古墳（4）がある。いずれも横穴式石室を埋葬施設とする。市川左岸の姫路市山田町城には諏訪神社古墳（10）、御大師山古墳（12）、塚ノ本古墳（13）、奥ノ谷古墳（14）、原田ノ森古墳（15）、三ツ塚古墳（16）などがある。諏訪神社古墳は全長30m、御大師山古墳は全長40mで、ともに前方後円墳で古式の横穴式石室を内部主体に持つ。当地域の首長墓であると考えられる。市川右岸の神崎郡香寺町城には市川支流の恒屋川、矢田部川流域を中心に片山古墳、狐塚古墳（17）、東羽部古墳（18）、地蔵山古墳群（19）、勅刺塚古墳（21）、柏尾古墳（22）、ウツキ谷古墳（24）、隠谷古墳群（25）、犬塚古墳（27）、宮ノ前古墳群（28）、大塚古墳（29）、伊勢山古墳（30）などがある。片山古墳は全長30m余りの前方後円墳で、円筒埴輪や形象埴輪などが出土している。宮ノ前1号墳は横穴式石室を内部主体に持ち、家型石棺が出土したという。市川右岸の姫路市上砥堀には権現山古墳（31）がある。権現山古墳は1辺20m余りの方墳で、横穴式石室を内部主体に持つ。石室の全長は14mを測り、玄室部は全長4m、幅2m、高さ2.5mを測る。終末期に造営されたものとみられる。市川支流の天川流域にはトンノク谷古墳（33）、庄北古墳（34）、宝塚古墳（35）、トウヅカ古墳（36）、篠東古墳群（37）などがある。箱式石棺を埋葬施設を持つと推定されている宝塚古墳を除き、他の古墳群は埋葬施設に横穴式石室を採用している。篠東古墳群は3基からなる古墳群で、中でも1号墳はT字形の横穴式石室を埋葬施設とする古墳として著名である。

当地域の後期の群集墳は、埋葬施設に横穴式石室を主に採用する。木棺直葬墓は横山古墳群で知られるのみで当地域ではあまり知られていない。今後の調査例の増加を待ちたいが、当地域は特に市川左岸において、溶結凝灰岩や多結晶凝灰岩など加工しやすい石材が容易に入手しやすいという地質的な条件に起因するのかもしれない。

### 第3節 塩淵古墳群

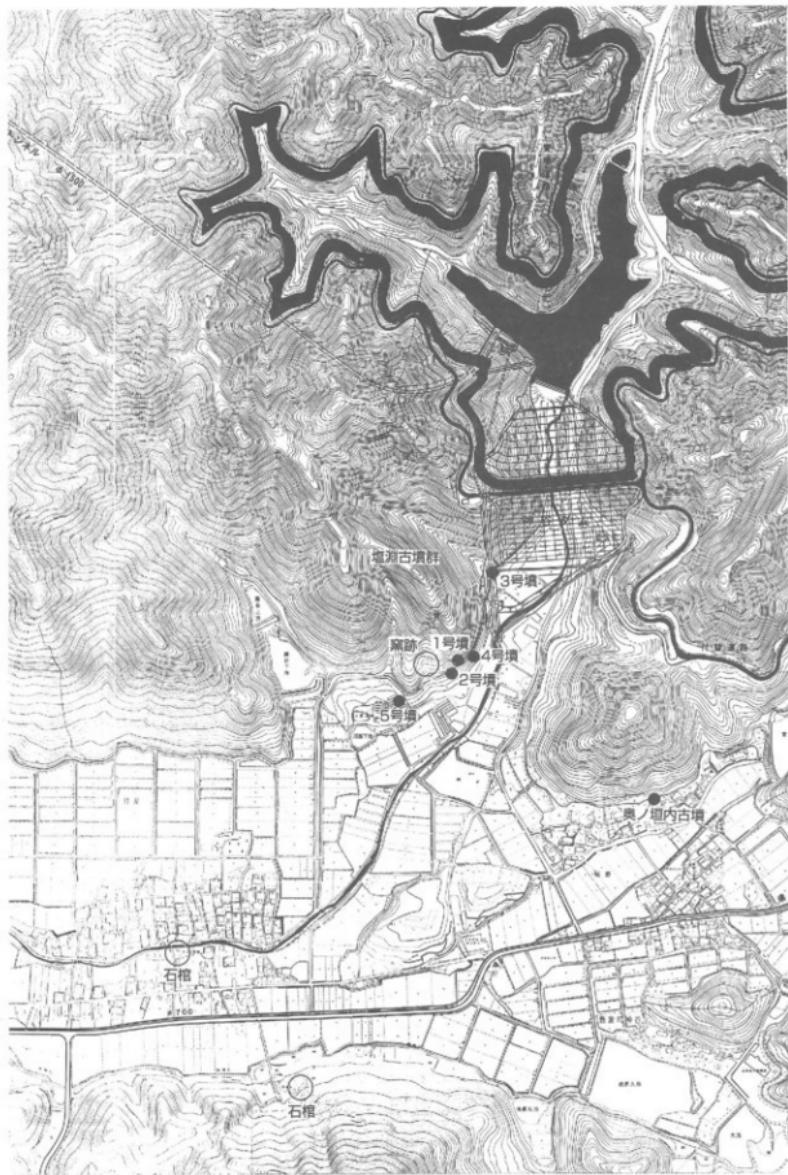
塩淵古墳群は市川支流の神谷川の右岸の山裾に位置する、総数5基からなる古墳群である。埋葬施設はいずれも横穴式石室を採用している。

神谷川上流域では、塩淵古墳群の他に、川を隔てた細野集落の裏山に位置する奥ノ垣内古墳1基存在する（昭和40年代の民家の改築時に破壊）。地元の方の話から埋葬施設は横穴式石室であったらしい。

塩淵1号墳は畠山の支尾根の斜面の傾斜変換点に立地する。明治29年の神谷池に伴う用水路造成時に渠道部分が大きく削平され、破壊されている。現況では、玄室の奥壁側の天井石が1枚だけ構築した状態で残存している。玄室の側壁は奥壁から3石目まで確認できる。奥壁には巨大



第5図 塩淵2号墳現況



第6図 塩淵古墳群全体図 ( $S=1/10000$ )

な鏡石が用いられている。

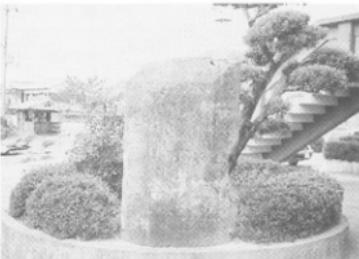
塩淵 2号墳は 1号墳の南西約10mに位置する。両袖式の横穴式石室を埋葬施設に持つ。羨道部の天井石は陥没しているが、玄室は完存している。袖石には大きな石材を柱状に 1石据えている。天井石は 3石が構架されている。奥壁には巨大な石材を 2石積んでいる。玄室は一辺 1m以上の大きな石材を用いている。床面には角礫が散乱している。

塩淵 4号墳は今回の調査時の再踏査により明らかになったもので、2号墳の北東約30mの竹藪の中に位置する。天井石が抜き取られたようで、墳丘中央が大きく窪んでいる。墳丘の周辺には天井石や側壁と思われる石材が散乱している。今回 4号墳と報告したが、『兵庫県埋蔵文化財特別地域遺跡分布地図および地名表 第2集』(兵庫県教育委員会 1968)などに見られる 3号墳と位置的に同一であるよう、本来なら 4号墳が旧の 3号墳で、今回調査した 3号墳は新規の古墳になる可能性がある。本来は、今回調査した古墳を 4号墳にすべきかもしれない。しかし、混乱をさけるため、今回調査した古墳を 3号墳とし便宜上今回は報告する。

塩淵 5号墳は今回の調査時の地元の方からの聞き取りにより明らかになったもので、戦時中（太平洋戦争時）に開墾を行った際、石棺が見つかり鎌刀が出土したことである。現在は養鶏場となっており、古墳の規模等は全く不明である。

また、塩淵古墳群の位置する谷一帯を通称「おかめ谷」という。塩淵 1・2・4号墳と塩淵 5号墳の間の小さな谷地形に窓跡があり、奈良時代の須恵器を採集できる。今回の踏査でも遺物を採集できたが、窓跡の位置などの詳細は不明な点が多い。

塩淵古墳群周辺で、石棺が 2例知られている。岩屋公民館のものは、凝灰岩の家型石棺の蓋で長辺 1.7m以上、短辺 1.1m、厚さ 0.2m を測る。地元の方の話では、圃場整備以前まで岩屋集落内で横に使用されていたとのことである。この他にもう 1点橋に使用されていたらしいが、所在は不明である。また、岩屋寺にも水盤に転用された家型石棺の蓋が存在する。凝灰岩製で、長辺 1.2m、短辺 0.7m、厚さ 0.35m を測る。



第 7 図 岩屋公民館の石棺



第 8 図 岩屋寺の石棺

表1 塩淵古墳群一覧表

古墳名	墳形	墳丘規模	墳丘高 (現高)	埋葬施設	石室全長	玄室長	玄室幅	玄室高 (現高)	羨道長	羨道幅	羨道高 (現高)
1号墳	円形	径約14m	(2.0m)	横穴式石室	不明	不明	1.4m	(1.2m)	不明	不明	不明
2号墳	円形	径10~11m	(2.5m)	横穴式石室 両袖式	不明	3.3m	1.7~ 1.8m	(1.5m)	不明	1.5m	不明
3号墳	椭円形	径8~9m	2.2m	横穴式石室 片袖式	5.0m	2.7m	1.2~ 1.3m	1.3m	2.3m	1.1m	1.2m
4号墳	円形	径8~9m	(1.5m)	横穴式石室	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明
5号墳	不明	不明	不明	横穴式石室?	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明

## 〈参考文献〉

兵庫県教育委員会 1968 『兵庫県埋蔵文化財特別地域遺跡分布地図および地名表 第2集』

兵庫県教育委員会 1980 『播但連絡有料自動車道路建設にかかる埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』

文化庁 1982 『全国遺跡地図 兵庫県』

神崎郡香寺町教育委員会 1986 『法花堂2号墳』

竹内理三編 1988 『角川日本地名大辞典28 兵庫県』

神崎郡香寺町教育委員会 1994 『香寺-香寺町埋蔵文化財調査15年の記録』

兵庫県教育委員会 1996 『篠東2号墳』

兵庫県土木地質図編纂委員会 1996 『兵庫の地質-兵庫県地質図解説書・地質編』

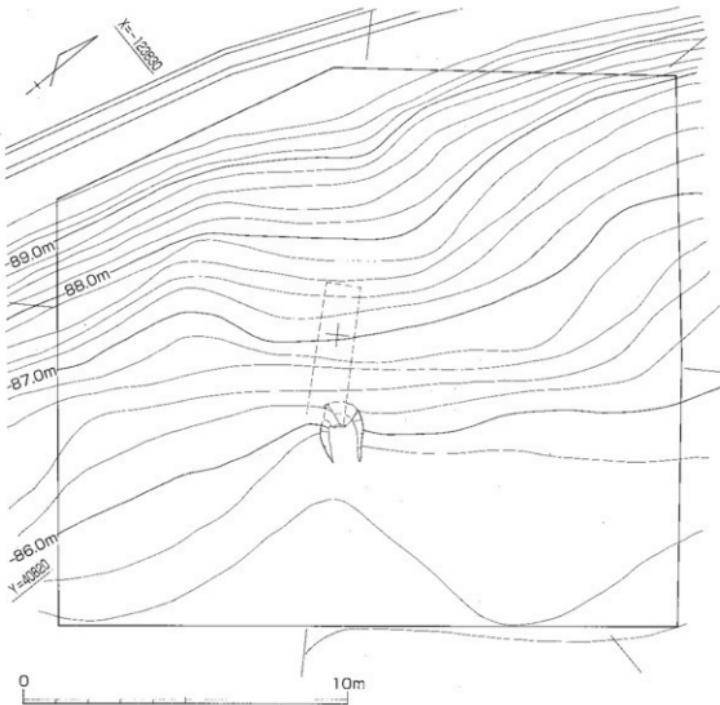
## 第3章 調査の成果

### 第1節 遺跡の立地

塙淵古墳群は豊富町神谷の岩屋集落の背後に点在する5基からなる古墳群である。古墳群は標高311.7mの塙山の支尾根筋および枝尾根の斜面の傾斜変換点に立地する。古墳群は神谷川により東西方向に開析された谷地形の中のさらに小さな南北方向の谷筋に面している。塙淵3号墳は古墳群の最北端、南北方向の谷筋の最深部に位置する。古墳群からは市川流域はむろん神谷川流域すら完全に眺望がきかない。まさに奥津城と呼ぶにふさわしい立地条件に位置する。

### 第2節 調査の成果

#### 1. 調査前の現状（第9・10・14図）



第9図 調査前地形測量図 (S=1/150)

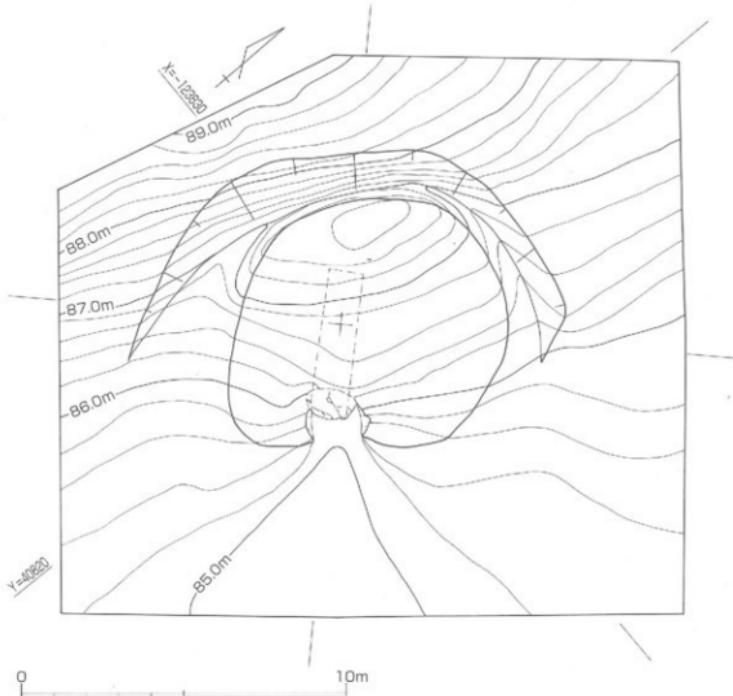
調査前の塩淵3号墳は、明治29年の神谷池に伴う用水路造成時および昭和10年の用水路改修時の廃土に厚く覆われ、周溝は完全に埋没していた。周溝の最も深い箇所では廃土と墳丘からの流出土の堆積が1.3mにもおよぶ。調査前の現状では、漢門部が僅かに幅60cm、高さ30cmほど開口するのみで、墳丘の高まりは全く確認できず、あたかも横穴のようであった。



第10図 塩淵3号墳調査前現況

## 2. 墳丘（第11図、図版2）

塩淵3号墳は全節で述べたとおり、斜面の傾斜変換点に立地する。当古墳は主軸を北西—南東方向に持ち、南北方向の谷筋に向いて構築されている。墳丘規模は直径約8～9m前後の不整形な橢円形を呈する。残存する墳頂のレベルは最高87.42mで、墳丘の最大比高差は約2.2mを割る。



第11図 調査後地形測量図 (S=1/150)

墳丘盛土は谷にむかって渙門側へ大きく流出し、渙門付近では天井石が露出していた。天井石上には墳丘盛土はほとんど残存せず、本来の墳丘の形状を大きく損なっている。

調査前、周溝は全く認められなかったが、調査の結果墳丘の山側斜面を大きく削り出し、馬蹄形に墳丘をめぐっていることが確認できた。

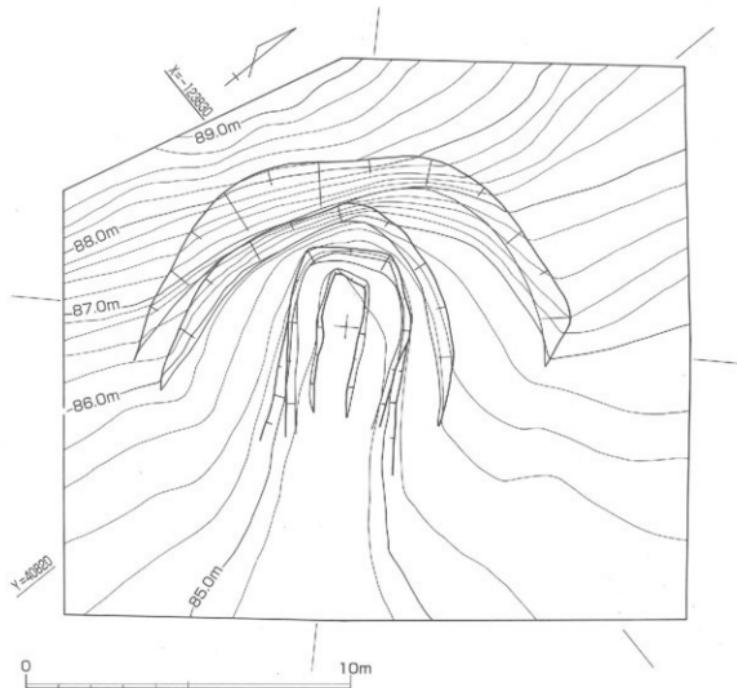
### 3. 内護列石（第12・16図・図版3）

石室の周囲を取り囲む1重の列石を検出した。列石の平面形は不整形な楕円形を呈し、直径は6.2~6.5m前後を測る。列石に使用される石材は、拳大から人頭大の石で、石室の石材と同じく、背後の山に露頭する凝灰岩および、崖縁性堆積物に包含される凝灰岩を用いている。

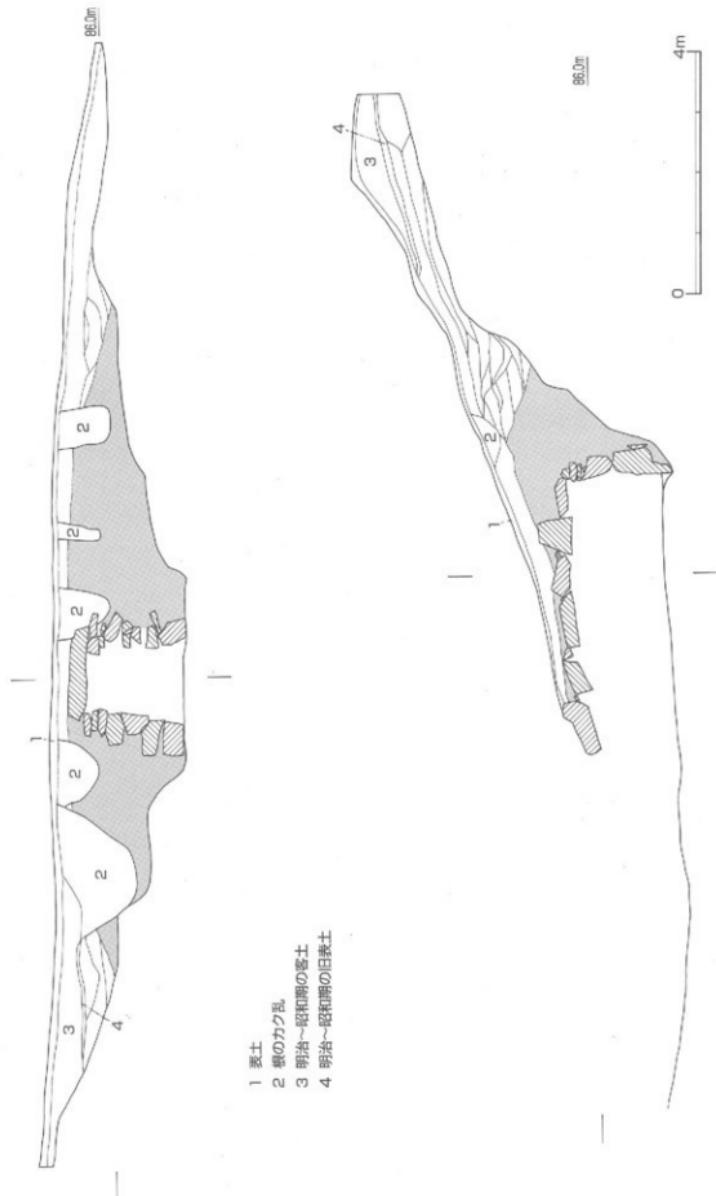
石室東側の列石は渙門の石材に取り付くが、西側の列石は渙門から奥壁側へ1mほどずれたところ



第12図 内護列石検出状況



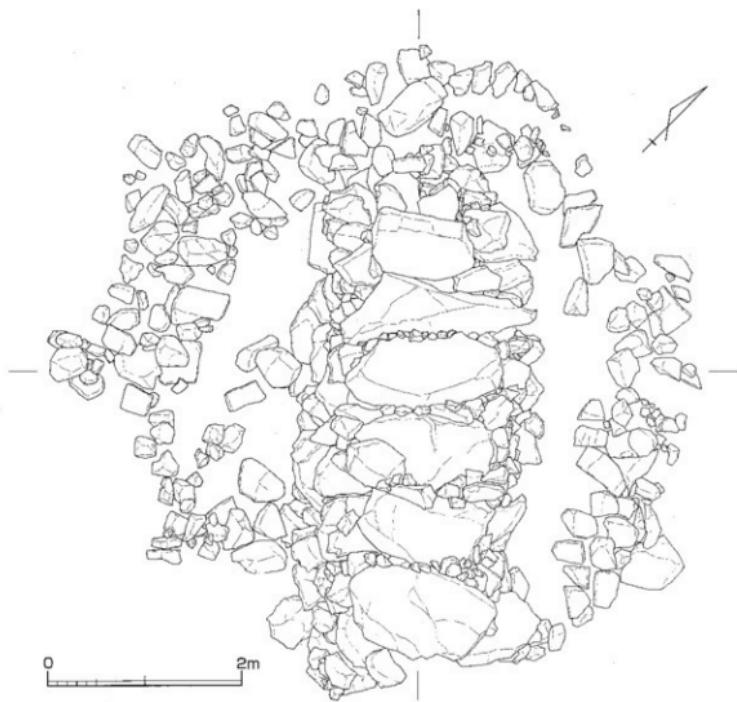
第13図 墳丘除去後地形測量図 ( $S=1/150$ )



第14図 土層断面図 ( $S=1/80$ )



第15図 填丘断面図 ( $S=1/50$ )



第16図 内謙列石平面図 ( $S=1/50$ )

ろに取り付く。列石のレベルは渓門付近では85.7~86.0m前後、奥壁付近では86.5~86.8m前後であり、山側に高く列石は巡る。

列石は3~4段石材を石室裏込め土に貼り付けたような状態で検出された。列石には基底石がみとめられず、積み上げたような状態で検出されていない。断面観察によると、列石は奥壁と側壁の背後の石室裏込め土（暗灰色粘質土）を土留めするように巡っている。

外謙列石の可能性も考えられたが、石室に近接しすぎて列石が巡る点、また外面に面を描えていない点などから、石室裏込め土を土留めするための内謙列石であると判断した。

#### 4. 石室（第17~22図、図版5・6）

石室の主軸はN44°W（石室の中軸線を基準）で、墳丘南東部のほぼ中央に開口している。埋葬施設は横穴式石室で、渓門付近で一部石材が抜け落ちているもののはば完存している。平面形は無袖か片袖か判別しにくい。ただし、天井石を水平に構架する点や石室の規模に縮小化傾向の見られる点など、無袖式に近い要素が多く認められる。しかし、東側壁の奥壁から5石目の大きな石材は柱状に据えられ、それを境に石の積み方が異なるので、袖石を意識しており玄室と羨道を区分するものと考えられる。現

時点では、形骸化した片袖の横穴式石室であると認識している。

石室の規模は、全長5.0mを測る。玄室部は全長2.7m、高さ1.4mを測り、幅は基底部の奥壁側で1.2m、玄門付近で1.3mを測る。羨道部は全長2.3m、高さ1.3m、幅1.1m前後を測る。ただし、羨門部分は西側の側壁の石が一部が抜け落ち、側壁は内側にずれ込んでいる。天井石も少し西側へ落ち込んでいるようだ。

玄室は奥壁を4段積みに、側壁は基本的に6段積みに構築する。左右の側壁はやや持ち送りされているものの、わずかに傾斜する程度である。全体的に大きな石材を基底部に用いている。側壁の2段目と4段目には部分的な横目地が通る。

羨道部は玄室と石材の積み方が大きく異なっている。東側壁の奥壁から5石目の基底石に大きな柱状の石材を据えている。袖石を意識しているものと考える。以下、羨道の東側壁の基底石は柱状に石材を据える。羨道側壁の石材は玄室側壁の石材と比較して、左側壁の石材は大きく、右側壁の石材は比較的小さい。

天井石は6石が構架される。玄室と羨道部の間の見上げ石は認められず、ほぼ水平に天井石を構架している。石室内の高さは1.3mを測る。

石室の石材には背後の山に露頭する凝灰岩および、崖錐性体積物に包含される凝灰岩を用いている。この石材は強度がなく脆いため、比較的割れやすい性格を持つ。石室構築時には、適当な大きさに加工するのに適した石材であろう。

棺は今回検出できなかった。また、釘や棺台など棺を想定させる遺構や遺物は全く確認できなかった。調査地付近の集落で石棺の蓋が2例確認できることなどから、石棺であった可能性が考えられる。

## 5. 構築方法（第13・15・20・24図、図版3・4）

墳丘断ち割り等の断面観察の結果、墳丘の構築方法は以下の様に推定できる。

①山側斜面を大きくカットすることで石室を載せる平坦地を確保する。平坦地の平面形は径8~12m程度の橢円形を呈し、カットした斜面の最大比高差は2mを越える。

②石室（基底石）を据えるための墓壙を再度掘削する。墓壙は長軸約5.4m、短軸約3.5m前後を測



第17図 奥壁



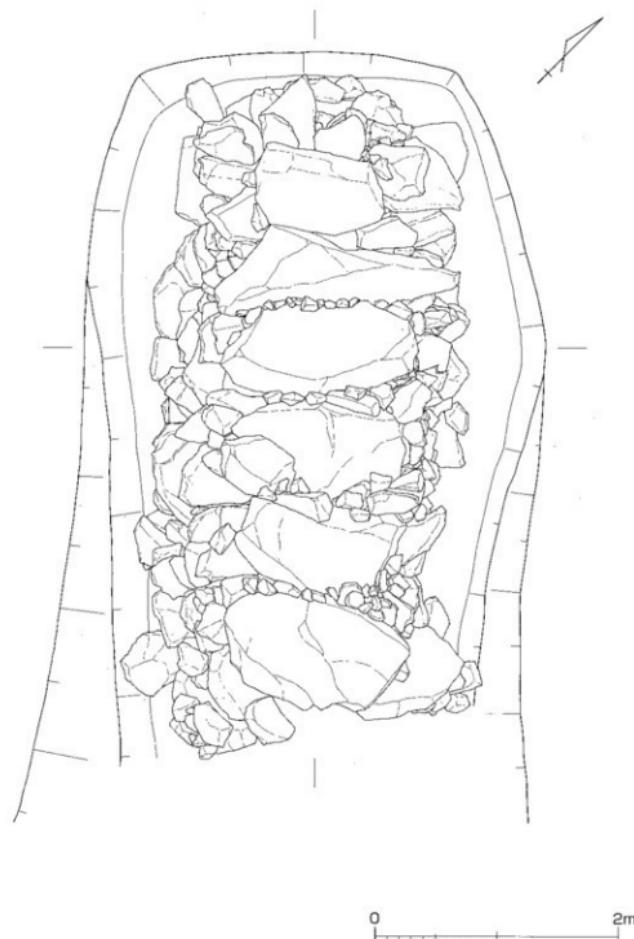
第18図 右側壁



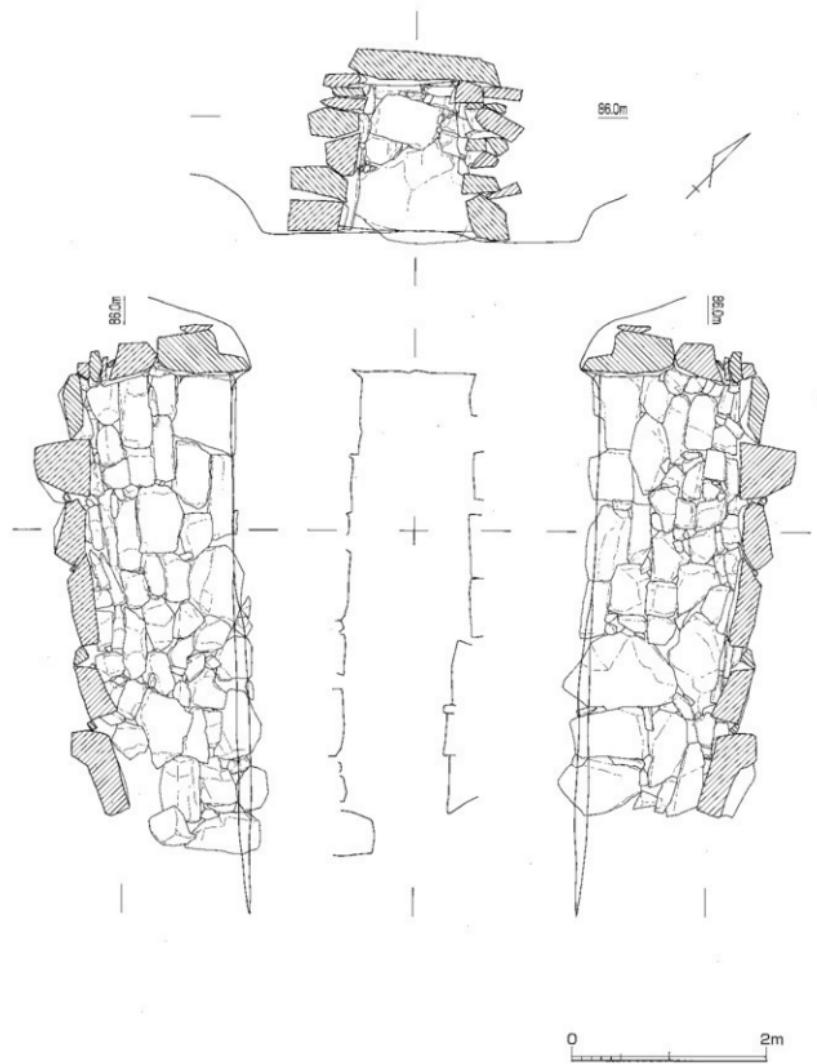
第19図 左側壁



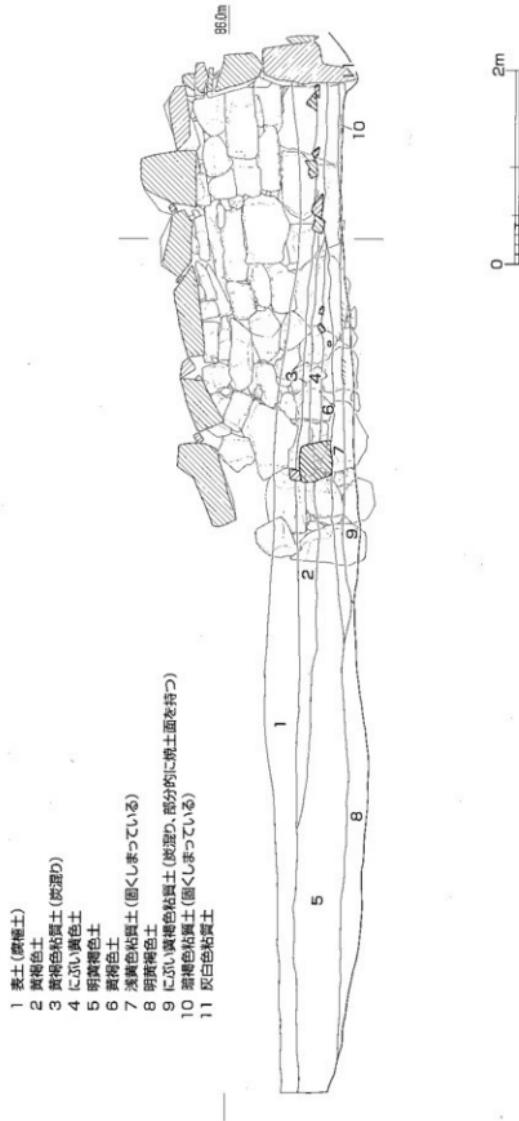
第20図 天井石間のぐり石



第21図 天井石上面からの俯瞰図 ( $S=1/40$ )



第22図 石室実測図 ( $S=1/50$ )



第23図 石室内埋土断面図 ( $S = 1/50$ )

り、戸門側に若干広がる。深さは0.3m前後である。  
③基底石を据え、堀り方を埋戻す。このとき裏込め土に灰白色粘質土（第15図2層）を用いる。

④2石目からは順次石材を据え、石材の間に小さい石をかましながら背後に暗灰色粘質土（第15図スクリートーン）を主に置いて搾き固める。その時、背後の暗灰色粘質土の流出を保護するため、石室を囲むように石材（内護列石）を貼り付ける。

⑤積み上げた側壁との間に石をかましながら、奥壁側から天井石が石室内面には水平になるよう構架する。また、天井石どうしの間にも石をかましで安定させる。その後、主に暗灰色粘質土を盛土し、搾き固める。

⑥主に黄褐色土（第15図5層）を盛って墳丘を整形し、完成である。



第24図 天井石除去作業

#### 6. 床面（第23・25～27図、図版7・8）

石室内床面は厚さ50～90cm前後の堆積が見られた。遺存していた面から30cm前後は締まりの悪い腐植土が堆積していた。床面を精査した結果、2面の床面を検出した。

上層の床面は固く締まった浅黄色粘質土（第23図7層）上で検出された。床面には石室の石材と同じ凝灰岩が散乱していた。石室上部からの転落も若干あるだろうが、石室開口後に持ち込まれたものと考える。閉塞石の一部も含まれる可能性もある。また、羨道部で石材が積み重なった状況で検出された。しかし、位置的にも玄門と羨門の間の中途半端な位置で、更に床面に石材を据え置いた（積み重ねた）ような状況は認められないことから閉塞石などが二次的に動かされたものと考える。床面とその上層からは土師質の皿や鍋、須恵器の壺の口縁部などが出土している。

下層と上層のレベル差は15cm前後である。下層の床面は炭はじりのにぶい黄褐色粘質土（第23図9層）と固く締まった暗褐色粘質土（第23図10層）上で検出された。床面の一部に焼土面が認められる。石材が2つ床に据えられたような状況で検出された。棺台の可能性も考えられる。床面からは土師器の皿が2個体出土している。

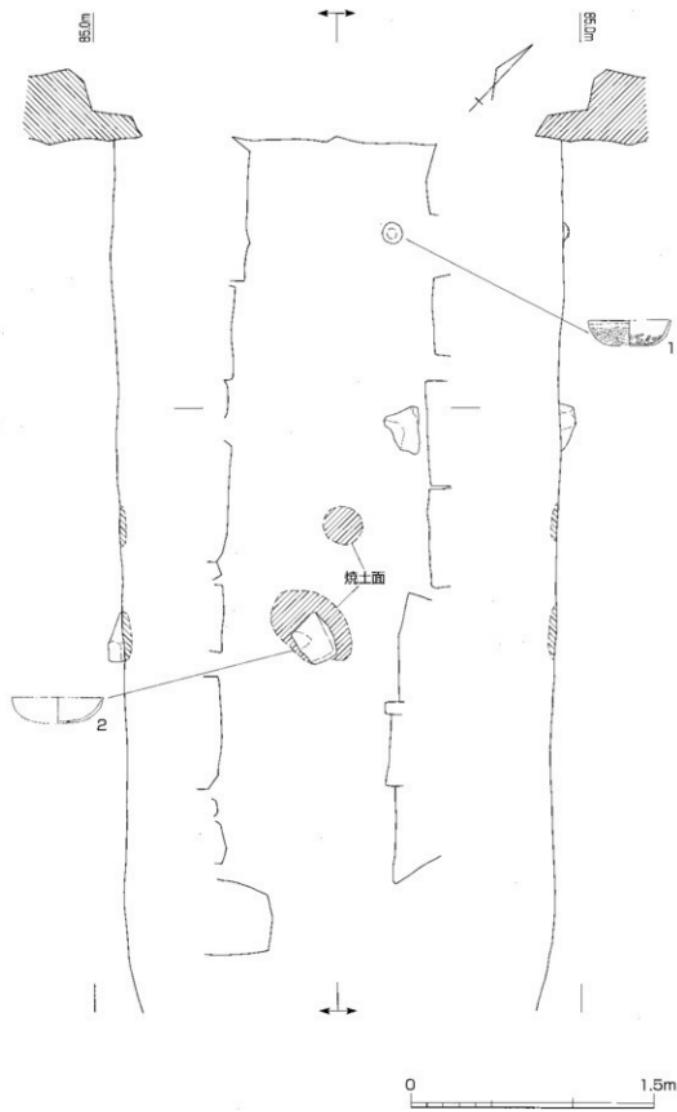


第25図 石室内埋土断面

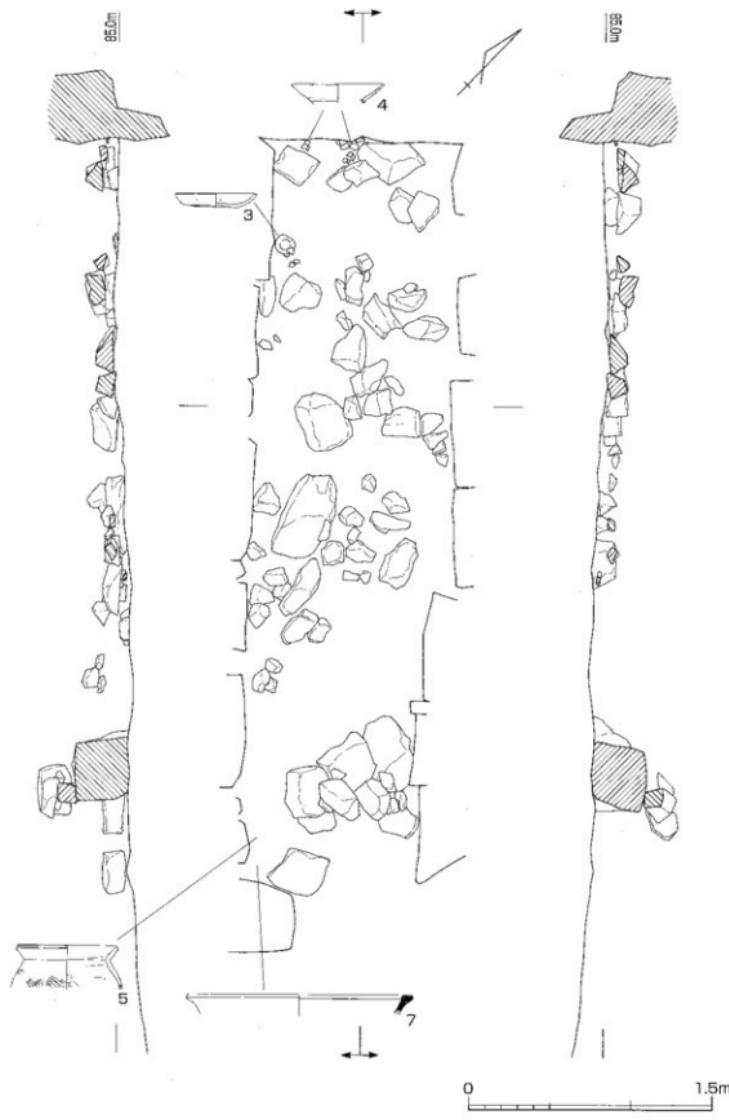
#### 7. 遺物の出土状況（第26・27図、図版7・8）

塩瀬3号墳の出土遺物は非常に少ない。主体部の横穴石室の遺存状況が良く、石室内への出入りが容易なため、盜掘や様々な理由による侵入が繰り返されたものと思われる。出土遺物から、鎌倉時代には既に石室は開口し、石室内は何らかに再利用されていたことが確認できる。

上層の床面からは土師質の皿（3、4）や鍋（5）、須恵器の壺の口縁部（7）などが出土している。床面上に散乱する石材の間から主に出土している。遺物はいずれも網片で現位置を保つものはなかった。



第26図 上層床面遺物出土状況 (S=1/30)



第27図 下層床面遺物出土状況 (S=1/30)

下層の床面からは土師器の皿（1、2）が出土している。土師器の皿（1）は石室北隅の奥壁の前から伏せた状態で出土した。現位置を保っているものと思われる。土師器の皿（2）は石室中央の焼土面直上の据えたような石材の西横から出土している。しかし、土器には焼けた痕跡は認められない。

墳丘盛土内からは須恵器の短頸壺（6）と鉄鏡（F 1）が出土している。墳丘造成時に混入したものと考えられ、3号墳の被葬者と直接結び付く資料と考えにくい。鉄鏡は、石室の形態や下層床面出土の土器の時期より遅るものと考えられる。他の古墳の副葬品の一部であったろう鉄鏡の当該地での出土は、塙淵古墳群の造墓時期を考える上では良い参考資料と言えよう。

## 第4章 出土遺物

塙淵3号墳における出土遺物は、主に石室内を中心として、墳丘（盛土内）及び墳丘外で確認している。しかし、調査時既に石室が開口した状態であり、後世の影響は免れないものとした予想通りに、古墳に関連すると思われる遺物は殆ど確認されず、またそれ以外の遺物も非常に僅少であった。

石室内の遺物については、地元の方々のお話から恐らく数十年前に持ち出されたと考えられるが、現在に至り、その所在等は不明である。

### 第1節 土 器

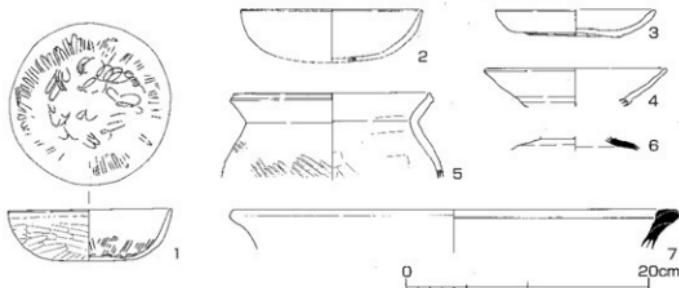
#### ・土器（第28図、1～5）

1は、完形の壺で、石室内の下層床面（飛鳥期）において出土した土器である。形態は、僅かに丸味を帯びた底部から上方へ緩やかに立ち上がる椀状を呈し、口径13.3cm、器高4.3cmを計る。口縁端部は丸く納め、外端部にヨコナデ調整による沈線を持つ。器面は、体部外内面に横方向のヘラミガキで調整し、口縁部はヨコナデ調整で仕上げる。また、内面には体部立ち上がりから口縁部付近にかけて斜行暗文、底部に無企画な螺旋暗文を施す。

2は、口縁部を含めて残存率1/2の壺で、石室内の下層床面（飛鳥期）において出土した土器である。形態は、丸底の椀状を呈し、復元口径14.7cm、復元器高4.25cmを計る。口縁端部は細身に丸く納める。器面は外内面共にヨコナデ調整で仕上げる。

3は、ほぼ完形の皿で、石室内の上層床面（中世）において出土した土器である。形態は、中央がやや反り気味の平底から緩やかに開きながら立ち上がり、口径13.0cm、器高2.25cm、底径7.8cmを計る。器面は、体部外内面共に回転ナデ調整だが、立ち上がり付近内面には工具のあたりの様な線状痕跡を残し、口縁端部は丸く納める。また、底部外面はヘラ切りの後ナデ調整で仕上げ、内面には仕上げナデを施す。

4は、底部及び口縁部の一部を欠損するが壺と考えられる、石室内の上層床面（中世）出土の土器である。形態は、底部付近で段を持ち、ラッパ状に開き、復元口径14.65cm、復元器高3.1cmを計る。器面



第28図 出土土器

は、体部外内面をヨコナデ調整で仕上げ、底部付近外面の有段部分は指ナデ調整を施す。

5は、肩下半部及び口縁部の一部が欠損する鍋で、石室の上層床面（中世面）出土の土器である。形態は、やや肩張りの胴上半部から頸部へ向けて窄まり、口縁部は屈曲し短く開く「く」の字状を呈する。口縁端部は、上方に幾分つまみ出す事で面を成す。復元口径は、16.0cmを計る。器面は、胴上半部外面において右下がりの平行タタキを施し、頸部付近までススが付着する。内面には横方向を基本とした板ナデ調整を施す。

#### ・須恵器（第28図、6・7）

6は、口縁屈曲部から肩部付近のみの小片だが、短頸壺と考えられ、墳丘盛土内出土の土器である。形態は不明だが、復元頸部径5.8cmを計り、比較的小型の器種である。器面は、外内面共に回転ナデ調整で仕上げる。残存率が悪く不確定だが、短頸壺であれば古墳に伴う土器であった可能性が高い。

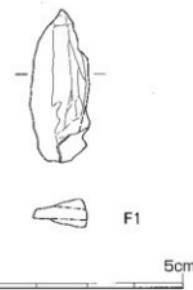
7は、口縁部の小片（口縁部全体の1/9の残存）のみの壺で、石室埋土内出土の土器である。形態は、やや外反気味に立ち上がるもので、口縁部の端部上には粘土紐を貼付する事で平坦面を成す。復元口径は36.4cmを計る。また、口縁端部内面は接合部分に沈線を残す。器面は、外内面共にヨコナデ調整で仕上げ、内面には焼成時の灰被りが残る。

以上、塩瀬3号墳から出土した土器の概要を述べた。前述した様に、古墳の石室内は少なくとも中世の時期には開口し再利用されており、副葬遺物はそれ以降に持ち出されたものと考えられる。ただし、石室内を使用した痕跡を残す上・下2面の床の内、下床面については、出土遺物が1・2の2個体に限定されることから、床面の時期が少なくとも2個の遺物の時期を上限とするもので、更には追葬の最終段階を示すものと想定される。1・2の時期は、恐らく飛鳥II期かそれよりやや後出するものと考えられる。また、それ以前の土器としては、6がそれに相当するのだろうが、如何せん器種の確定が困難な状況である。土器の出土が墳丘盛土内という事から、恐らく古墳築造時に混入したものと見られるが、この様な状況のため古墳の造営年代を押さえる物の根拠としては、余りにも貧弱なものとなっている。

ところで、その他の遺物（3～5・7）については、全て上層床面及びその埋土内で出土している。坏（3・4）に加え、煤が付着している鍋（5）は、石室内で多量に検出した炭片とも合わせて、生活の痕跡を非常に強く感じるものであり、石室内において一定の期間使用面が存在したことを実証するものである。

## 第2節 金属器（F1）

塩瀬3号墳の金属器は、鉄器1点のみが墳丘の盛土内から出土した。鉄器の形態は、片側端部が若干尖った梢円形（土筆の頭状）を呈する。長辺の片側端部はやや欠損しているが、長さ3.15cm、最大幅1.25cm、厚み約0.26cmを計る。全体の約半分が鏽附れていて、状態はあまり良いとは言えず、器種の特定がやや困難な状況にある。ただ、欠損している部分で僅かに窄まる形態を呈する事から、茎部が籠被部から欠損した鉄錐の一部と考えて妥当だろう。



第29図 出土金属器

## 第5章 結語

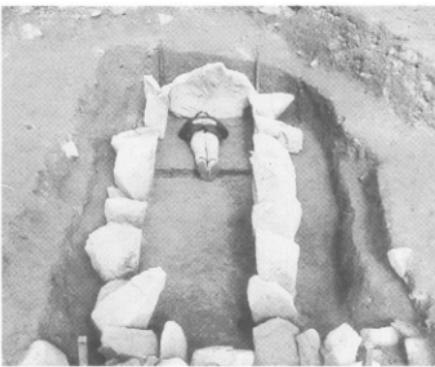
塩淵3号墳の調査の概略は以下のとおりである。

- ①塩淵3号墳は5基の古墳からなる塩淵古墳群の1基で、古墳群の最北端に位置する。築造時期は7世紀前半であると考えられる。
- ②墳丘の規模は直径約8~9m前後の不整形な梢円形を呈する。墳丘盛土は羨門側へ大きく流出し、墳丘本来の形状を損なっている。墳丘内には土留めの列石（内護列石）が巡る。
- ③埋葬施設は左片袖の横穴式石室である。石室の遺存状況は非常に良い。石室の規模は全長5.0mを測る。石室内の各部分の規模は玄室長2.7m、玄室幅1.2~1.3m、玄室高1.4m、羨道長2.3m、羨道幅1.1m前後、羨道高1.3mを測る。横穴式石室でも形骸化したものである。
- ④出土遺物は非常に少ない。古墳に伴う遺物はわずか4点にとどまる。出土遺物から、少なくとも鎌倉時代には石室は開口しており、何らかに再利用されていたようだ。

以下に、若干の考察を加えて、結語としたい。

塩淵古墳群の所在する豊富町は、『播磨風土記』に見える神崎郡の藤山里の比定地である。藤山といふのは、品太の天皇の御藤（御冠）がこの山に落ちた。だから、藤山といい、また藤岡という。

藤山里の比定地の内で古墳時代前期に遡る古墳に横山7号墳がある。横山古墳群は前期から後期へと継続する古墳群である。更に、横山古墳群が立地する尾根の東山麓には横穴式石室を内部主体とする後期の三方古墳、池ノ下古墳群がある。藤山里の比定地の内で古墳前期から後期へ継続する唯一の地域である。藤山里比定地の内の他の古墳群（塩淵古墳群、玉塚古墳、砂川古墳他）などは後期になり初めてその地域に築造される。塩淵古墳群が古墳時代後期になって築造されるは、小規模首長が古墳を造営することが可能になったこと以外に、初めて神谷川上流域が開発可能になったため集落とともに移動したのか、あるいは墓域だけ新設されたのか興味深いところである。周辺での集落跡の調査例の結果に期待したい。



第30図 調査時の一風景

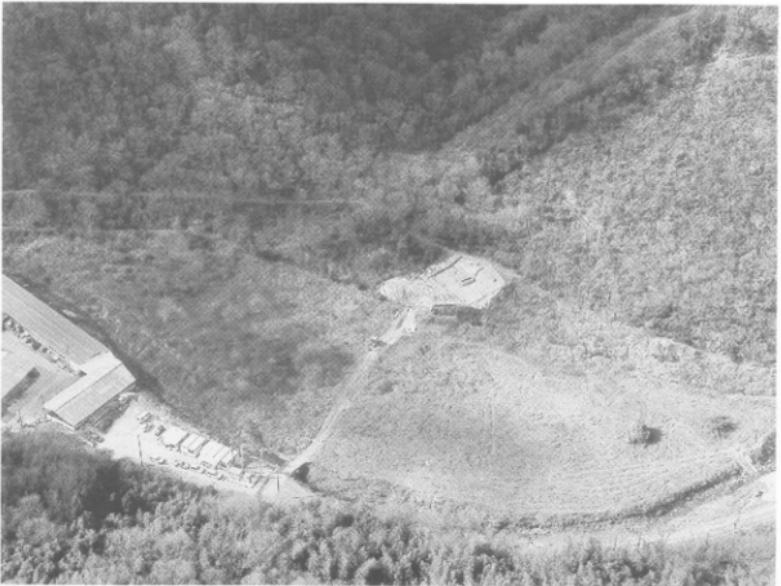
# 報告書抄録

ふりがな	しおぶらさんごうふん							
書名	塙淵3号墳							
副書名	神谷ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第181番							
編集者名	深江英憲・服部 寛							
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所							
所在地	⑦652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号 TEL. 078-531-7011							
発行年月日	西暦1999(平成11)年3月31日							
所収 遺跡名	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
塙淵 3号墳	兵庫県姫路市 豊富町神谷字 塙淵	28201	960343	34度 52分 10秒	134度 46分 13秒	1996.11.21 ? 1997.01.30	290m <sup>2</sup>	神谷ダム建設 工事に伴う発 掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
塙淵3号墳	古墳	古墳時代終末期	古墳1基	土師器 土師質土器				

# 図版



塩淵古墳群遠景（北上空から）



塩淵3号墳全景（東上空から）

図版 2 塩淵 3 号墳墳丘



全景（南東から）



蓋門部（南東から）



塚丘断面（南東から）



塚丘北側断面（北東から）

図版 4 塩淵3号墳墳丘断面



墳丘東側断面（南東から）



墳丘西側断面（南東から）

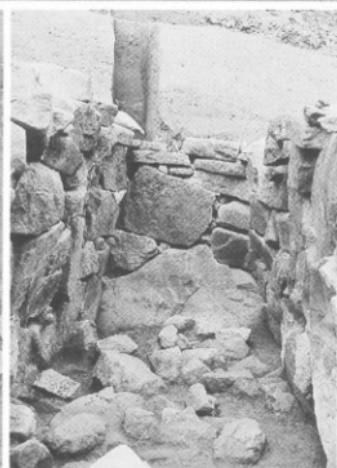
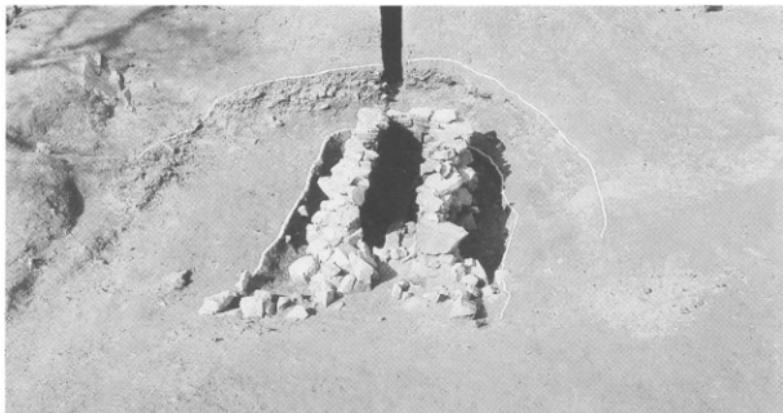


石室露出状況（南東から）



狭門部（南東から）

図版 6 塩淵 3 号墳石室内部



上 天井石除去後全景  
(南東から)

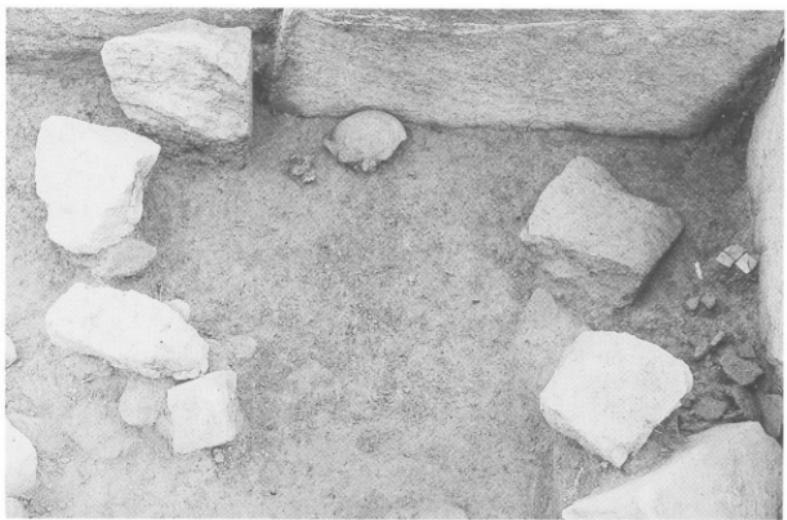
中左 石室内アップ  
(南東から)

中右 石室奥壁石組状況  
(南東から)

下 石室東側壁石組状況  
(南西から)

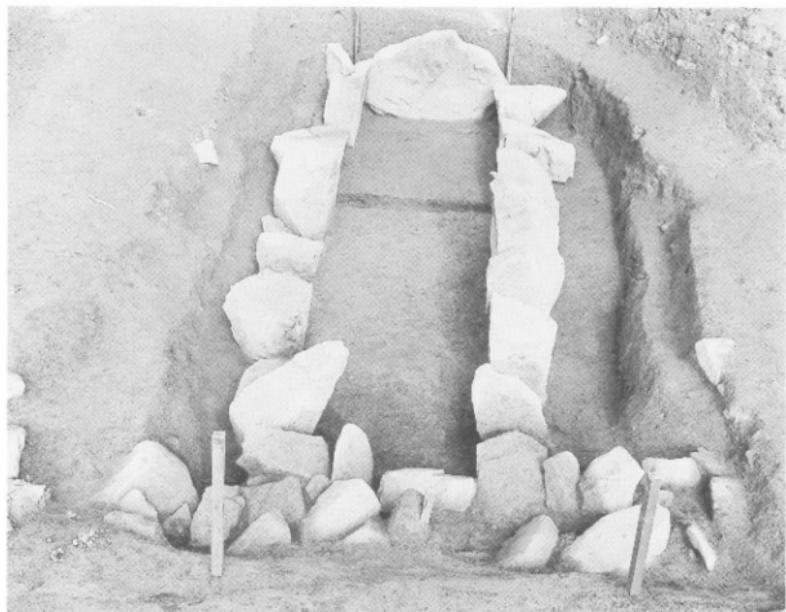


石室床面（上層）検出状況（南東から）



石室床面（上層）土器出土状況（北東から）

図版 8 塩淵 3 号墳石室床面（下層）



石室床面（下層）検出状況（南東から）



石室床面（下層）土器出土状況（南西から）

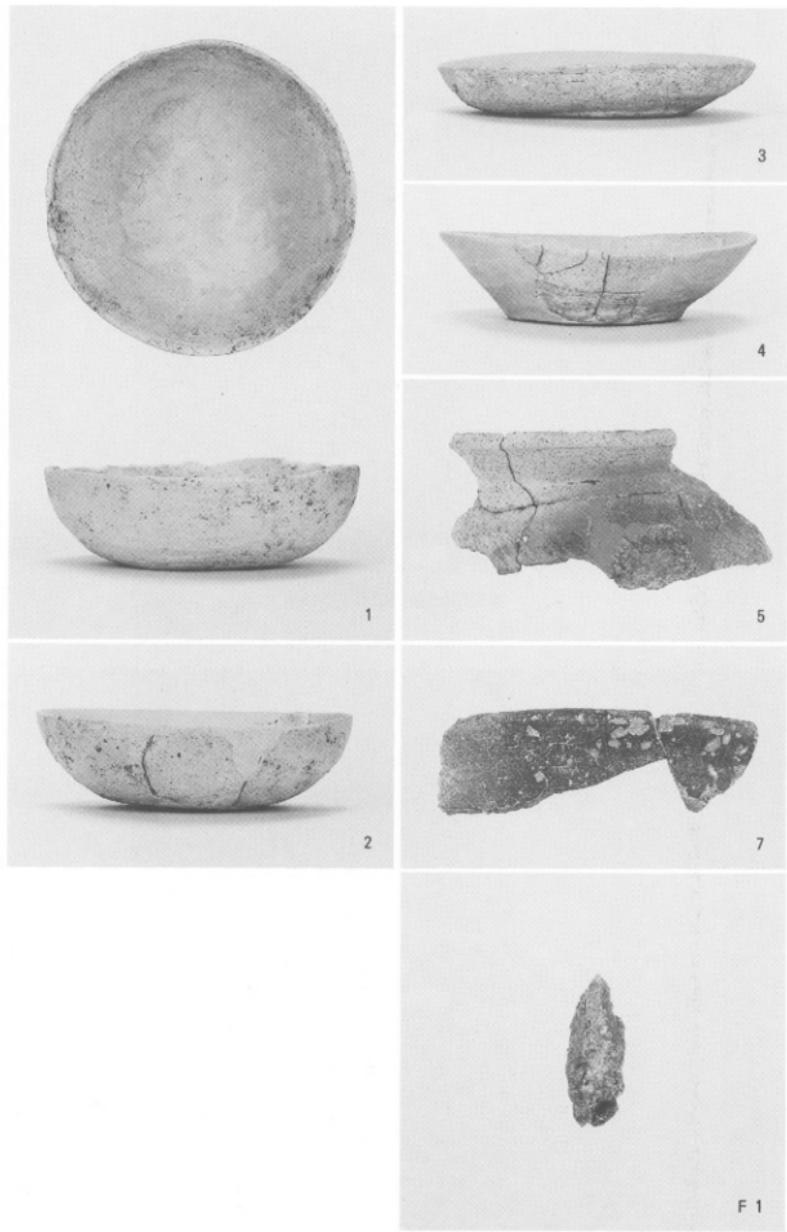


基底石除去後状況（南東から）



石室 石材

図版 10 塩淵 3 号墳出土遺物



---

兵庫県文化財調査報告 第181冊

1999年3月31日 発行

**塩淵3号墳**

— 神谷ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所  
番652-0032 神戸市兵庫区荒田町2-1-5  
TEL 078-531-7011

発行 兵庫県教育委員会  
番650-0011 神戸市中央区下山手通5-10-1

印刷 (有)アロエ印刷  
番650-0027 神戸市中央区中町通2-3-8  
TEL 078-371-3831

---